ボラステ つなぐ ストーリー 7

卒業後の自分を想像する
センパイからのメッセージ

I　　さ　　ん

平成26年3月修了／小学校教諭

先生だけには なりたくなかった

小学生の頃、教師の印象は最悪だった。
高学年のときの担任は、言っていることとやっていることがいつも腑に落ちない。
子どもながらにそれは痛烈に感じていて、こんな大人だけにはなりたくない。
先生という職業だけは嫌で、それ以外ならどんなものでもいいとさえ思っていた。

大学時代を京都で過ごし、週末は地元に帰って、子ども向けのキャンプのボランティアをしていた。そこでは、宿泊型のキャンプのプログラムを立案することを任された。1日キャンプをして子どもたちが成長していく姿を見るのが楽しいなあと漠然と思っていた。

京都の大学を卒業後、商社に入った。しかし、ちょうど入社する直前にリーマン・ショック（一連の金融危機における象徴的な出来事）があり、混乱するぐらいの不景気状態。仕事の業務内容もこの先不透明だと感じ、転職を考えるようになった。

「本当は何がしたいのか」「楽しかったことは何かを思い返してみた」
それらを考える中で、頭に強く浮かんだのが“子どもが成長するのを見るのが楽しかった”という学生時代の記憶だった。

全体的に子どもだけじゃなくて、“自分は人が成長する姿を見るのが好きなんだな”ということに初めて気づいた。
また、映画・ドラマ・漫画が好きで、その中でも共通して見るのが、人が成長している物語。大学時代に子どもを連れてキャンプに行ったことがつながり、教師を目指そうと思った。

大学時代は自分を確立するとき

通信教育ではなく、兵庫教育大学の小学校教員養成特別コースを選んだ。
理由は、対面で授業を受ける方が自分には合っていると思ったこと、そして卒業後の教師率が高いから。

勉強はすごくよかった。
先生方の授業が楽しく、面白かった。
同級生の子たちもいろいろな子がいた。
キャラも濃かった。それも刺激にもなった。

しかし、でも、環境が・・・・・・。

私は京都市内の大学に通っていた。そこは学生の数が多く、いろいろな人がいて、多様性が入り混じっていた。またバイト先でも他大学の人と接する機会も多かった。いっぱい刺激を受けていた。

刺激ある大学時代と新社会人時代（酔いつぶれる自分や人に迷惑かけている先輩を見て）で、失敗する姿を見せたり、見せられたりしている中で、どうしなくてはいけないかを学んだ。

そんな経験をしていたので、いきなり山奥に来て当初は何をしたらいいか困った。

逆に、学生時代にたくさん遊んできたから落ち着いて勉学に打ち込もうと切り替えた。

でも、ここの学生たちは、服装や髪型がまじめそうな人が多く、話している内容も高校生のような雰囲気がある。また同じ教師を目指す人としかしゃべれないという環境は、残念だなと思った。

「今の学生に伝えたいこと」

大学時代は自分を確立するとき、自分のアイデンティティを確立するためには、難しいことに挑戦して失敗しておくことは大事。したことないことをいろいろやってみたらいい。
また他大学の学生との交流を積極的にすることで、いろいろな刺激を受けることもできる。中でも「ボランティア」は、いい活動だと思う。もちろん、教育関係の会社に就職活動（インターン）をするのもいいのでは。

就職活動中に自己啓発や自分のことをよく見つめ直すことができる。私の場合は、何十社からも落とされるという苦い経験をしてとてもよかったと思う。

教育現場
～挫折を味わって～

現在小学校教員として８年目。たった８年しか働いていないけど、挫折の時期は結構あった。

挫折を味わったのは、学級崩壊。規模的に金八先生の世界くらいだった。原因はめぐり合わせ・・・かな。ずっとそれが続いて、最後は乗り越えるというか、過ぎ去ったという感覚。周りの先生方や管理職の先生も支えてくれた。

市が違うだけでも学校の雰囲気は全然違うし、同じ市内でも学校で雰囲気がだいぶ違う。
同じ学校でも5年ぐらい経ったら雰囲気はどんどん変わるので、先生としていつかは挫折するときは絶対にくる。挫折を乗り越える力というのは、必要。挫折がないなんてことは、たぶんないと思う。

商社マン時代と今が違うのは「やりがい」

子どもは素直でがんばろう！というような意欲とか、前向きな子が多いので、そこは自分も見習うところだ。そんな刺激をもらえると「やっていてよかったな。」と思う。
特に男の子は手が出たりとか口悪かったりとかそういう子がいたときに、「それをやめたい」「本当は優しい人になりたい」と言うので、「実際にやめるのをがんばってみよか」と話し合った。そこからだんだんと手が出ることがなくなっていくのを見ると、「成長しているところがいいなぁ」と思う。
その感じた成長をそれぞれの子ども達に伝えることを大事にしている。

休み時間の使い方は、いつも話しかけに来ない子にしゃべりかけに行くようにしている。
勉強が、できない子にはよくしゃべりかけるけど、できているし困り感もない子たちをほったらかしにしているのが申し訳ないなぁと思う。

今は自分が大学時代に想像していた教師像どおりの生活。
ただ、やろうと思ったらいくらでも仕事はできて、もっとこういうことしたいな、これをしたかったなと思うことばかり。

商社マン時代と今が違うのは、「やりがい」。
子どもたちは、私が教えることを全部吸収しようとするどん欲な感じが見ていてすごい楽しい。教師（私）が子どもたちに必要とされているのが嬉しいのかもしれない。

「夢について」

自分の「夢」は今まで持ったことがなかったが、子どもたちと触れ合う中で夢は持った方がいいかなと最近思うようになった。

こんな教育したいな

えこひいきはしたくない。
いろんな情報は与えるけど、「～すべきだ」とか偏らせたくない、縛りたくないと思っている。
「絶対」「当たり前」「普通」の言葉が嫌い。「挨拶できて当たり前」「宿題持ってきて普通」とかも嫌いでそういう言葉は使わないようにしている。「～した方がいいよ」という言い方をしている。

唯一「するべきだ」と伝えているのは、注意をされたら何度も同じ失敗をしてはいけない。失敗したら次失敗しないように。失敗したままで終わるのではなくて、失敗したら挽回すること。失敗は誰でも１回２回はするので、失敗したら改善するように伝えている。命の危険なこと以外は「するべきだ」とは言いたくない。

私が失敗したのは、昔、子どもが失敗したときに“怒って叱った”こと。今は怒らずに怒りを伝えるようにしている。

距離が近くなる分、怒ってしまいそうになるけど、怒らなくてもできるんだなとちょっとずつ思ってきている。
先生ってすごくまじめなので、がんばり過ぎる先生に「まっ、いいかっ！」でいいんだよと言いたい。

番外編　Iさんおススメの本や漫画・映画など

成長する漫画でオススメなものは、幸村誠さんの「プラネテス」「ヴィンランド・サガ」。井上雄彦さんの「リアル」。映画は、成長という観点からは、「恋愛小説家」、挑戦という観点からは、「食べて祈って恋をして」が面白かった。